

ン液剤の効果を安定化させる手段が必要であると考えられた。

土壌処理剤フルミオキサジンは、帰化アサガオ類に対して非常に高い防除効果が得られている事例もある一方、2009年に行った試験2では、十分な効果は見られなかった。このような効果の安定性に関わる条件等が今後明らかとなれば帰化アサガオ類防除体系の強力なツールとなるだろう。また、ベンタゾン液剤の複数回処理や帰化アサガオ類に効果がある他の全面茎葉処理剤などが登録されれば、除草剤の全面処理のみの体系で安定的に防除が可能となるかもしれない。今後の展開が期待される。

引用文献

- Barker, M.A. *et al.* 1984. Control of annual morningglories (*Ipomoea* spp.) in soybeans (*Glycine max*). *Weed Science* 32, 813-818.
- Chachalis, D. *et al.* 2001. Herbicide efficacy, leaf structure, and spray droplet contact angle among *Ipomoea* species and smallflower morningglory. *Weed Science* 49, 628-634.
- 遠藤征馬ら 2010. ダイズほ場に発生した帰化アサガオ類の除草剤畦間処理による除草効果. 愛知県農総試研報 42, 51-56.
- 福見尚哉・山下幸司 2005. 鳥取市の水田地帯における帰化アサガオ類の発生と生態. 雑草研究 50(別), 46-47.
- 平岩確ら 2005. 愛知県水田転作ダイズほ場における帰化アサガオ類の発生状況. 雑草研究 50(別), 50-51.
- 平岩確ら 2007. 愛知県でん畑輪換水田ほ場

における帰化アサガオ類の発生状況. 愛知県農総試研報 39, 25-32.

Jones C.A. and L. Griffin 2010. Red morning glory (*Ipomoea coccinea*) response to tillage and shade. *Journal American Society of Sugar Cane Technologists*. 30, 11-20.

Kurokawa, S. *et al.* 2015. Canopy height-to-row spacing ratio as a simple and practical on-site index to determine the time for terminating *Ipomoea coccinea* control in the Japanese soybean growing systems. *Weed Biology and Management*, in press.

Norsworthy J.K. and M.J. Oliveira 2004. Comparison of the critical period for weed control in wide- and narrow-row corn. *Weed Science* 52, 802-807.

保田謙太郎・住吉正 2007. 北部九州地域の大畑畑へのアサガオ属植物の侵入程度. 雑草研究 52(別), 32-33.

田畑の草種

数の子草 (カズノコグサ)

イネ科カズノコグサ属の1, 2年生草本。草丈は30cm～90cmほど。春から夏にかけての水田周りで普通に見られる。水田では耕起、代掻き前の草であり、ことさらに雑草と言うわけではないが、麦畑では麦より大きくなり、多発すると麦にとって厄介な雑草である。

春に穂が出る。出たばかりの穂は、主軸に沿った総状花序。この時期の穂は、色こそ違え『鯉』の魚卵である『数の子』にそっくりである。穂が『数の子』のような黄金色になる頃には、花序の枝が開いて数の子っぽさは薄れてくる。しかし、ひとたびその数の子を一腹二腹手に取ると、間違えることはない。見分けが難しいイネ科草種の中でも分かりやすい。

史前帰化植物とされ、この特徴的な穂は、万葉人の目にも留まっていたはずである。しかし、この数の子草は田んぼ周りで群生し、彼らが春に『菜を摘む丘』では、

(公財)日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地 須藤 健一

群生していることもなかった。彼らは『鯉』を食することもなく、『数の子』を口にする事もなかった。『鯉』が歴史書に出てくるのは室町時代に入ってからである。

遠い子どもころの記憶がある。

花序を引き抜き、先端の1粒を残して枝も種子も取ってしまう。抜いた花序の元を持つと釣竿になる。辺りにカエルがいたらその釣竿をカエルの顔の前で振る。まず間違いなく飛びついてくる。スズメノテッポウの穂先でもできたが、数の子草の方が、食いつきが良かったように記憶している。そのカエルを使って、今度はザリガニを釣るのであるが、遠い昔の、すねを放り出して飛び回っていた子どもの遊びであった。

こんな句があった。

『むき出しの脛(すね)のすり傷 数の子草』日比野里江
数の子草は晩春の季語である。